

国語



奈良女子大学附属中等教育学校
(奈良・国立)

ふただ
二田貴広先生

教員歴21年目。秋田県出身。新潟大学大学院現代社会文化研究科修了。秋田の公立高校で教員キャリアをスタートさせ、2004年から現職。国語科としてメディア・リテラシー教育にも力を入れているほか、本年度は進路指導部主任も務める。



人や社会の〴〵を問うことで、

自身をアップデートし続ける人材になってほしい

↓ 新しい考えをつくり、学び方を学ぶ授業

生徒の課題・育成したい力

殻を破って、新しいこと・わからないことに
踏み出す力を付ける

二田貴広先生は教員になった当初から、生徒が何かを「できるようになる」方法を学べる授業を意識してきた。例えば短歌の授業であれば鑑賞に留まらず、短歌を作れるようになる授業。小説であれば登場人物の心情理解ができるようになる授業などだ。それらができるようになれば、生徒たちは楽しんで次の短歌を作ってみたくなくなり、新しい小説を読んでみようという学びの意欲につながるからだ。

現在勤務する奈良女子大学附属中等教育学校の生徒たちに対しては、「目の前のテキストや人、出来事にはすべて背景やスキーム（枠組み）があることを理解し、そのスキームを相対化できる力」を身に付けてほしいと語る。「本校の生徒たちは、将来、社会を革新したり貢献するリーダー的存在にな

授業デザインへの落とし込み

読解・思考に留まらず、
探究して新しい考えを生み出す

ることを期待されています。そうした人材にとっては、『そもそも、人々とは何か、社会とは何か』を問うことが、社会貢献やいい仕事をする基盤になると

二田先生が「殻を破る力」を付けるために国語の授業で取り入れているひとつは、文章を「探究していく」ことだ。教材の要旨を理解するだけでなく、小説であれば「その場面はなぜあるのか」という、作者がその場面を設定することで何を語ろうとしているかの「そもそも」を問うメタプロットへのアプローチだ。さらに、授業の中で「生徒自身の経

考えています」

「殻を破って、新しいことに踏み出す力が足りていないので、授業設計で二歩踏み出す力を付ける仕掛けも考えています」

「殻を振り返る時間を設け、「どうして自分はそのようなことをしてきたのか？」と自分の行動を考える課題も設けている。自分の活動の背景を自身で考え意味づけしてから、教材に再び触れたときに、教材が語ろうとしている「そもそも」と、自分の行動の「そもそも」が結びついていく。

「自分の在り方を問い直すことで、殻



【単元を通じたデザイン】

科目・単元名

現代文 (3学年)
学び方を学ぶ ～論理の読解から「点をつなぐ」システム思考へ～

教材

教科書教材「原始社会像の真実」に加え、サブ教材「アマゾン、俺たちのもの」(新聞記事)、「変わる高校国語、なくなる文学-内田樹、小川洋子、茂木健一郎に訊く」(文芸誌記事)

単元の目標

文章の論点を明確にしながら要旨を把握し、多面的・多角的な視点から評価する能力の向上。自分自身の価値観や思考をメタ認知する力の向上。文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結びつけて、新たな観点から自分の考えを深め新しい考えを生み出す創造的に考える力の向上。

●単元の流れ (全2時間 65分×2コマ)

1時間目

要約

3つの教材を読み、それぞれについて内容を各自簡略に要約する

論点を導く

要約をもとに、それぞれの文章の論点を導き出す。筆者の主張を理解するだけでなく、そこから読み取れる価値判断とは何かを考える

2時間目

グループトーク

各自が印象に残っている学校行事についてグループで共有し、ラーニングパターン・ランゲージ※のカードを用いて、行事から自分自身が得られた学びについて言語化

1時間目の要旨をまとめた映像を見て、問いについて考える

3つの教材の論点を、どのように結びつけることができるかを考え、タブレットを用いて教育用SNSのednityに記述、共有

単元の狙いを生徒自身が考える

本単元が、二田先生のどのような意図によってデザインされたものかを考えてednityに記述、共有

※慶應義塾大学・井庭 崇教授が考案したツール

【授業実践のポイント】

取材時の授業は上記の単元の2時間目にあたる。著者や論者の価値観が表れる3つの教材の論点を結びつけるとともに、生徒たちが自分たちの体験を意味づけする作業を取り入れ、「なぜ自分はそのようなことをしてきたのか?」を問い直すことで、教材の読み方が多角的になる経験を促している。

●自分自身の経験を意味づけし、言語化する訓練を同時並行



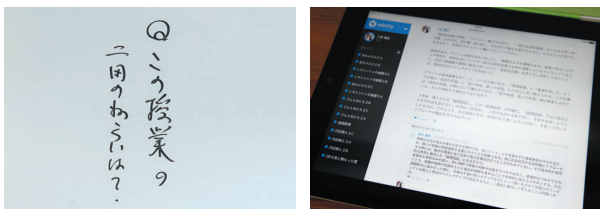
教材から離れて、今までの学校行事でのポジティブな体験についてグループで語り合い、ラーニング・パターンが書かれたカードからその体験について意味づけをする。

●複数教材の論点を結びつけ、全員で共有



「1時間目でまとめた3つの教材の論点を結びつけると、どんなことが述べられるか?」という問いについて考え、回答をタブレットで全員が共有できる教育用SNS上に記入。

●単元のねらいを、生徒自身に考えてもらう



2時間の授業を通してどんな資質・能力を育みたいと二田先生は考えているか、授業のねらいそのものを生徒に考えさせ、その回答もSNSで共有する。

を破っていく方向に進むのではないかと
という仮説のもとで授業を組み立てて
います」
例えば、取材当日の二田先生の授業
が上記の単元だ。この日は3年生の現
代文の読解で、3つの教材の論点の「点
をつなぐ」思考を育成することをテー
マとしている。
1時間目では3つの教材を読み、そ
れぞれの論点をまとめる。2時間目は
アイズブレイクから始まり、教材とは一
見関係のない、生徒たちの行事での体
験についてのグループトークを入れている。
そのときに、学び方のコツがまとめ
られた「ラーニング・パターン」というカ
ードを使い、自分たちの行事からの学
びを意味づけして言語化していく。

アイズブレイクを踏んだ後に教材に
戻り、3つの教材の論点の結びつけを
行うことで、生徒たちは教材を通して
自分の在り方も考え始める。情報同士
の隠された関係性や、自分で新しい関
係性に気づくことで、新しい考えを創
っていくことにつながるという。
考えた内容は教育用SNS上に記
述回答するが、自分の言葉で言語化す
ることで論理力と表現力が鍛えられ
る。さらに全員で共有し、他者の意見
を知ることでも多様な論点に気づき、自
分の考えも相対化できる。
驚かされたのは、授業の最後に「この
授業の二田のねらいは?」という問いを
出したことだ。一般的に授業のねらいは、
授業の冒頭に教員側から示されるこ
とが多いのではないだろうか。

「メタ認知力を身につけてほしいので、
生徒と触れあう時間が長い目の前の
教員のスキームをまずは捉えてみよう、
と生徒に伝えています」
教員が生徒にとってどんなスキーム
をもった人間で、生徒たちに何を学ん
でほしいと思っているのか、今日の授業
や先生の存在の「そもそも」も考える
訓練をしているのだ。
「これをやっている、キャリア教育な
どで外部の講師を招いたときにも」こ
の人のねらいはなんだろう?と徹底的
に考えられるようになります。講師に
限らず、人とコミュニケーションする際
に、相手の背景を考えて人間関係を築
くようになっていきます」

「今日の授業のねらいは何か？ その評価は？」

●学びと学びをつなげ、高次な学びに自らレベルアップする積極性が身につく。このように、自身のさまざまな活動を活動だけで終わらせてしまうのではなく、机上の学びや人との関わり合い、日頃感じていることから学んだことにつながることは、多様な能力をもつ人間になることにつながると思う。

●単なる二項対立に留まらず、両者を使用して新たな価値観を創り出す能力を伸ばそうとしたと考える。それはこれからの時代に求められる能力であり、それを育もうとしたこの授業は傾聴に値する。この授業の実用性については未来においてしか評価できないと思う。

●隠れた関係性を見つけることは、今までの価値観や意見をより良く変える可能性があり、そのことは考え方を深めると感じた。仮に、人とのコミュニケーションがうまくいかない、対立してしまうことが多い、といった状況に陥ったときには、この授業のことを思い出すと何かしらのヒントを得られると思った。

「4月から自分自身がどう変化したか？」

●現代文にかかわらず二項対立の考え方がいかに大切なかということや、教科の壁を超えて知識と知識が繋がるということを感じ、確実に自分の今までの考え方や物の捉え方が進化したと思う。少しは人間力が上がったと思う。

●4月の私は、何かと善悪を付けたがっていた。当然自身についても善悪を付けていた。しかし現代文の勉強において1つの価値観にとらわれず、複雑さに耐える能力が育まれたことから、今の自分の環境だけを絶対視せず、ありのままを見られる努力ができるようになった。

●相手の意見や主張に対して、疑問をもったときには積極的に聞いてみよう、という考えが生まれた。他者との話し合いにおいて、相手の意見を完全に否定することは何の利益も生まれないが、相手の意見について何も干渉しないことも同様に、自分の中で不満が溜まったり、偏った価値観に基づいたものができてしまうので、より良い生き方、社会、学校...などにしていくために、お互いを信頼したうえで議論をし、切磋琢磨していくべきだと感じた。

授業デザインの理念

自分が面白いと思った感覚を
生徒にも感じてもらいたい

単元ごとの授業デザインの工夫とともに二田先生が常に心がけているのが、「面白い」から入ることだ。

「私自身が大学時代に、自分でわかって気づくというアハ体験がすごく面白かった。だから生徒にもその感覚を体感させてあげたいと思っています。面白くなければ学ぶ意味がないですし、学びが続かないですから」

生徒にアハ体験をさせるために、例えば小さなことでも「できた」と感じさせる成功体験を積ませることもある。

また、読解の際に初読した後、文章の背景にある歴史や文化などの知識を入れることで、次に読んだときのテキストの印象がガラッと変わって見える体験をさせるなどだ。

「基本は自分自身が授業や教材、世の中を面白がっている姿勢を見せることです。自分だけでは限界があるので、私が面白いと思う社会の人と関わって彼らを講師として連れてきたりします。すると生徒たちは『この先生は社会のおもしろい知人がいっぱいいる人なんだな』と、私の話に耳を傾けてくれるようになります」

大人しい生徒でもグループワークに参加しやすくしたり、発言しやすいう環境づくりも意識している。

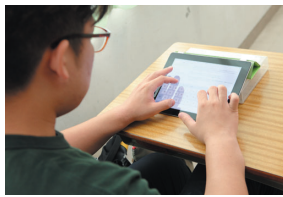
「私もグループ内で発言することが苦手なんです。そういうプレッシャーを生徒にはなるべく与えたくない。だからグループで会話するときの順序を予め決めたり、SNSに回答を書き込むことで、みんなの前で発表しなくても意見を全員に共有できる場をつくったりしています。他の生徒たちも大人しい生徒の意見を知ることができて嬉しいと言っています」

相手のスキームを捉えてメタ認知する授業も、もともと自身が苦手だったから始めたことだという。

「なんでも鵜呑みにしてすぐ騙される。でも、考えることを面倒がっていただけだったと思います」

自身のさまざまな経験を積み上げて授業デザインに生かしている二田先生に、今後、未来を生きていく生徒たちにどんな力をつけ、どんな授業をしていきたいか聞いてみた。

「新しいことは特にありませんが、知識やスキルを身に付けて自分をアップデートしていくと見える世界が変わり、自分で世界を表現したり創造できるようになります。テキストの理解や消費だけではなくクリエイティブする側に生徒を育てるのがこれからの国語の授業だと考えています」



生徒の変容・成長

自分をメタ認知し、自らハードルを上げる生徒が増えた

教材に書かれたこと、自分自身の活

動、目の前の先生など、自らと関わるあらゆる事象についての背景や「そもそも」を考える授業を受けてきた生徒は、どんな変容を遂げているのだろう。

「『覚えて答えればいい』とか、『どこまででいいよね』という、生徒が減りました。私のテストはすべて記述式で問題も公開しているのですが、事前に『ちょっと見てください』と書いてくる生徒もいます。それで『説明が足りないよね』などとアドバイスするとさらになんばつて考えてくる」

て考えてくる」

取材時にも、アイスブレイクで使ったラーニング・パターンについてもっと知りたいと、授業後に二田先生に質問に来る生徒たちもいた。

生徒たちの成長の姿は、二田先生からの問いへの生徒たちの回答や、「4月から自分自身がどう変化したか？」についての回答がありありと物語っている(右図)。自身を客観視し、授業での学びを今後どう役立てたいかについてまです、論理的に述べられている。